



全日本社会貢献団体機構の 展望と果たすべき役割

平成17年(2005年)12月12日「全日本社会貢献団体機構」が創立しました。
全日本遊技事業協同組合連合会(全日遊連)を母体として発足した本機構は、
全日遊連の傘下組合がそれぞれ続けてきた社会貢献活動を、
全国レベルで普及・促進・広報することを活動目的としています。
少子高齢化やグローバル化など、社会の環境が大きく変容するなかで、
「社会貢献」に寄せられる期待が高まると同時に、
また乗り越えるべき課題も山積しています。
ここでは、新たに本機構理事長に就かれた山田茂則氏を囲んで、
霜鳥敦、松尾守人、脇田直枝の各役員にお集まりいただき、
機構の設立背景やこれからの社会貢献のあり方、
ひいては本機構の活動はどうあるべきかをテーマにお話いただきました。

「社会貢献」とは何か？

司会(松田 輝雄) 全日本社会貢献団体機構の今後の展望という難しいテーマでの座談会ですが、まずは身近なところから話しを始めさせていただければと思います。「社会貢献」と聞くと、何か難しいことをしなければいけないような気にもなってきますが、例えば遊技場を、家族も安心して誰もが楽しく遊べる場にするということも社会貢献の一つだと思います。

霜鳥 敦(監事) おっしゃる通りです。悲しいことですが、毎年、真夏になると駐車場に幼児を放置する事故が繰り返されています。

この悲劇を無くす取り組み、例えばこれも立派な社会貢献ですよ。
山田 茂則(理事長) この問題に関しては、全国的な取り組みとして、1時間に1回、従業員が駐車場を見回り、確認・報告することになっています。店によっては監視員がいて、子どもを乗せて駐車場に入った時は、遊技場への入場をお断りしています。ただ最近は車の窓に黒いフィルムが貼られ、遠くからだと車内がよく見えない場合があり、だから見回りを強化しています。

霜鳥 法令を守っていればそれでいい、それ以上のことは考えなくてよいという発想では何も解決しないでしょうね。

山田 痛ましい事故のたびに、遊びの場が安全で安心な場所で



山田 茂則
全日本社会貢献団体機構 理事長
全日遊連 理事長



霜鳥 敦
全日本社会貢献団体機構 監事
弁護士



なくてはならないと強く感じます。以前は、とにかく子どもは店内立入禁止。法律でそう定められていますから。しかし法律がそうだからという視野狭窄的な考えは、ますます受け入れられなくなるでしょう。子どもを駐車場に放置するまでに客を熱中させる遊びそのものに問題があると指摘する識者もおられます。その対策の一つとして、いわゆるライトユーザー向けの機械を設置していこうというキャンペーンを開始しました。夢中になっていただくのは商売として有り難いことなのですが、一方で、どうやって節度を持って楽しんでいただくか。これも私たちの大きな社会的責務であるし、結果として社会貢献につながるとしています。また、これも当然と言えば当然なのですが、従業員雇用を確保し、利益を生み出し納税するということは、事業者が果たすべき基本的な社会貢献ですね。業界全体の売上が30兆円と言われていますが、たとえ利益が出ていなくとも、5パーセントは消費税として社会に還元しているわけです。他にも、余り玉による「善意の箱」事業や、自販機売り上げからの還元金など様々な貢献の形態がありますが、いずれも日々の営業を堅実に営むことは社会貢献の大きな土台になると思います。

司会 子供に夢を与え、青少年育成など、いろんな意味で社会貢献の象徴的な事業の一つがプロ野球ですね。松尾理事からも、ご意見をうかがわせていただけますか？

松尾 守人(理事) ロッテの場合、NHK厚生文化事業団と協同でチャリティ大相撲を開催していたりもしますが、日々のビジネスを営むことが社会貢献という意味では、国民的娯楽であるプロ野球の社会貢献上の価値は高いと思います。ただ、野球に関して一言だけいえば、極論しますがほんの一握りの球団を除いて、ほぼすべての球団が赤字です。昨年日本一チームであるロッテでさえ30億円の赤字。私が代表やっている時は7億円の赤字でした。代表として5年間、役員は12年間やりましたが、野球は社会貢献



松尾 守人
全日本社会貢献団体機構 理事
パシフィック野球連盟 参与
元ロッテ 常務取締役

だという認識がなければ、それだけの資金を毎年出すということはできなかったと思います。他の企業に目を転じれば、伊藤園のチャリティ自販機や、コカ・コーラの北海道での自然環境保護事業。ポッカの緑の募金や、ホンダでは砂漠の緑化事業や地雷除去事業も手がけています。しかし、社会貢献事業を自発的にやっているのは、経営的に余裕のある企業なのかもしれませんね。

「全日本社会貢献団体機構」 設立の経緯

司会 場も温まってきたところで、そろそろ本題に入りたいと思います。理事長の山田さんに「全日本社会貢献団体機構」設立の経緯や目的を改めてお聞かせ願えればと思います。

山田 全日遊連には、全国に51の協同組合と1,104の支部組合がありますが、それぞれの組合・支部は、合計すると年間17～18億円のお金を社会貢献事業に拠出して来ました。しかし本当に必要とされているところに資金が提供されているのか。どのように役立ったのか分からない拠出金もあり、組合員の不満が高まっていたのも事実です。この課題意識がそもそもの起点です。

松尾 私は、この業界が、十数億円のお金を社会貢献費用に使っているという事実にも驚きましたね。私だけでなく、周りの人間に聞いても誰も知らない。この事実を、きちんと世間に訴えてもいいのではないかと。アピールの方法はないのかと強く思いました。

霜鳥 そういう意味では、全国の遊技場の総意と社会貢献という旗印の下に業界がまとまり、また他の業界からの賛同等も得て今回機構が組織化され、新しいスタートラインに立てたこと。これは、社会貢献活動の目的を明確にするという意味でも、そして業界のプレゼンス向上という側面でも、とても大きいと思っています。



脇田 直枝
全日本社会貢献団体機構 理事
早稲田大学 評議員
上智大学文学部 講師



山田 おっしゃる通りだと思います。今回、この新機構の設立において相応の予算化がなされたことは、51組合の理事がみなさん賛同してくれたということと同義だと思います。加えて今回、社会貢献費用に当てるため、年に1回、パチンコ、パチスロ祭りが行われ、そこに集まるお金を中心に1億数千万円を機構に提供することが決められました。みなさんに十分、機構の意図を理解していただいたと認識しています。

司会 確かに一つの団体に1億数千万円出しているなんて誰も知りませんよ。それだけにこの機構は期待されるわけです。

山田 期待と言えば、新機構は私たちの業界に対してもっと第三者的な視点で「期待」して欲しいと思っています。つまり「遊技業界はこういう方向で社会貢献を進めていって欲しい」と期待していただく。示唆していただく。そうすれば、現在の社会貢献活動のたとえ何パーセントでも、その方向に推進することができる。また表彰一つとっても、全日遊連が貢献事業や功績者を表彰するのは、第三者機関である機構が表彰するのとは受け手の感動も違うでしょう。それに、社会貢献はその性質上、当事者が声を大にしてアピールしにくく、マスコミなどにも取り上げられずに忘れ去られてしまうことが多い。そうではなく、遊技業界が長年続けてきた貢献活動を第三者機関が認めてあげれば、結果として遊技業界のアピールにも繋がると思うんです。

脇田 直枝(理事) 一方で、世間に知ってもらうための善行というのは、本当のボランティアでも、メセナでもないと常々思っています。話がそれるかもしれませんが、最近聞かなくなった言葉に「喜捨」がありますね。聞かなくなったというより、日本人の心から失われてきている。神社やお寺で見る奉灯という意味もわからないようです。連帯という言葉も消えている。いき過ぎた個人主義のせいか、協同の意識も薄れている。ノープレスオプブリージュ[※]という言葉も



一時流行しましたが不況と共に沈静化しました。現代社会における社会貢献活動はどうあるべきか、なかなか難しいテーマです。

霜鳥 確かに誉められるためにやるのは本末転倒ですね。だからこそ、この機構の大きな役割の一つは、これまで気づかれなかった善行に光を当て、顕彰する、支援するというのではないのでしょうか。

司会 そうした社会貢献に光を当てることは、結果的に機構自体も世の中に知られるところとなり、機構の認知度が上がれば、遊技業界の人たちも改めて自分たちの取り組みの自己確認ができますよね。

松尾 そうですね。昨年、新宿区のイベントでロッテの新宿工場が表彰されていましたが、きちんと認められたことによって、工場で働く700人全員がリサイクルやゴミの減量意識が高まっていたそうです。

山田 社会的評価は時に想像以上の効果をもたらしますよね。私たちの1,104支部、1万5,000店舗が組織を挙げてそういう気持ちになったら、もっと本当の社会貢献ができると思うのです。この点こそまさに新機構に期待する大きなポイントの一つですね。

※身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務があるという、欧米社会における基本的な道徳観。

具体的な社会貢献策

司会 他に、機構への注文、要望、期待、具体的な提案などがございましたらお聞かせ願えますか？

脇田 これからの社会を考えると少子高齢化は避けて通れない問題だと考えています。例えば、団塊の世代が大量に退職する2007年問題も目前に迫ってきていますが、この世代の活用は、重要テーマだと思います。先日、都内のとある大学生に聞いたところ、



パチンコ屋で1日1万円のアルバイトをしているとか。ならば中高年者でもと思うのはいささか安直でしょうか。

山田 高齢者の方には、駐車場の管理や店内の清掃などをお願いしています。しかしホール内の作業は体力的にハードで、正直、若い学生と高齢者では仕事の順応のスピードに差があるのは事実ですね。

脇田 大手スーパー店のパートはミセスの女性の3交代制で成り立っているようですが、同様に定年退職者を再雇用すれば顧客の確保にもつながりますし、企業としての評価も高まる。いずれにしても、中長期的には、若者人口が減り、労働力における中高年の占める割合が高まっていくことは紛れも無い事実です。

司会 単に既存の企業体に高齢者を再雇用させるという視点ではなく、高齢者の知見が生かされる事業・公共サービスを新たに生み出せないか。そういう発想も必要でしょうね。

脇田 そうですね。例として適切かどうかはわかりませんが、衰退をたどっていた賭博の町ラスベガスが女性市長の手によって見事に蘇生したのをご存知でしょうか。これまでラスベガスを2回ほど訪ねたことがあります。家族で楽しむための様々なケアが実に精緻に施されているのです。例えばホテルはテーマパーク化し、スフィンクスやバリとかベニスとかそこにいるだけで世界のエッセンスが楽しめるのです。大人がルーレットをやっている間は子供たちは遊園地や託児所で預かってくれる。夜はブロードウェイにもない新作のミュージカルを家族で楽しむ、といった仕掛けです。ここにヒントが隠されていないでしょうか？ 近頃は大型のパチンコ店も多いですが、例えば、ビル内に喫茶店やレストラン、保育所を併設するとか。地域商店会や他の企業と組んで、ショッピングモールで共存共栄を図る方法はあると思います。

山田 脇田さんのお話を伺っていて思ったのですが、仮に1万

5,000店の3分の1でも保育施設を提供できたとしたら素晴らしいでしょうね。少子化が進む中、女性が安心して子どもを生める環境を提供することは社会的にも意義深いことだと思います。費用面や実際の運営など乗り越えるべきハードルは多いでしょうが、それ以前に機構がそうした理想をまずは掲げることが大事でしょう。

脇田 思いつくままに申し上げますが、教育も重要なテーマだと思います。いま政財界では松下政経塾出身者が活躍していますし、古くは戦後の日本復興の一時期を担った政治、経済界の人たちが、フルブライト(アメリカの留学奨学金制度)の恩恵を受けたことは知られています。これらと同等とまではいなくても、次代の人材を育てるという視座で何か貢献できることはないでしょうか？ 既存の仕組みや発想ではなく、もっとユニークな新しい形の教育機関を機構が作る。理念に共鳴してもらえれば機構のPRにもなります。いささか壮大ではありますが、日本の未来への投資としてぜひ考えてほしいと願っています。

松尾 私は今後の日本のNPOに注目したいですね。アメリカのGDPの1割はNPOを含めた公益サービス事業です。日本もいずれそうなるのだとすれば、機構もこの方面に注目していいのではと思います。

存在感のある機構となるために

霜鳥 夢は広がるばかりですが(笑)、夢を具現化するためにも、また個別の社会貢献活動に光を当てるにふさわしい存在であるためにも、機構自体のステータスやプレゼンスを高めていくことが必要だと思います。JRA(日本中央競馬会)はステータスを高めることに上手く成功しましたね。

松尾 技術的な話になりますが、確かにJRAは、JRAの名を冠して好感度の高いタレントを起用したCMを放映し、イメージアップし

ました。「社会貢献」という一見とっつきにくいテーマだからこそ戦略的なプロモーションが必要かもしれません。

霜鳥 そういった活動も含めて、畢竟、全日遊連がこれまでやり続けてきたことを単にそのままやり続けるわけではない。別の視点・視座で活動していこうとするところに、今回の新機構の出発のベースがあるわけですね。

司会 話も尽きないところですが、そろそろ時間となりました。山田さんからの理事長メッセージで座談会の結語としたいと思います。

山田 社会貢献にも当然関連するのですが、私たち遊技業界の射幸性(賭博性)をいかに是正するかに大きな課題意識を持っています。射幸性の低い、楽しく遊べる機械の普及が業界の命運を握っていて、今はその瀬戸際にあると思っています。ここを2年かけて取り組みます。カジノは賭博であり、私たちは風営法の下で遊技として認められている。同レベルの射幸性が許されるわけではなく、昔のパチンコのように遊びとしての世界観を再現できれば、業界のイメージアップにつながると思います。全機械の入れ替えは事実上不可能ですが、数十パーセントでも導入できればビギナーやライトユーザーの方が安心して楽しめると思っています。今、メーカーと協同して機械の開発を行い、10月に展示会を予定しています。結局、冒頭の議論に戻るのですが、家族でも楽しんでいただける安全・安心の遊技環境の提供こそ社会貢献という観点でも、重要な課題だと認識しています。

司会 そこが新しい出発点ということですね。

山田 まず隗より始めよ。遊技環境をきちんと整備することこそが社会貢献の出発点であり、社会の中でより評価される貢献の中身を作っていくのだと信じています。

司会 新機構の発展を大いに期待しています。ありがとうございました。



司会

松田 輝雄

日本野鳥の会理事、東京農業大学客員教授
元NHKアナウンサー

